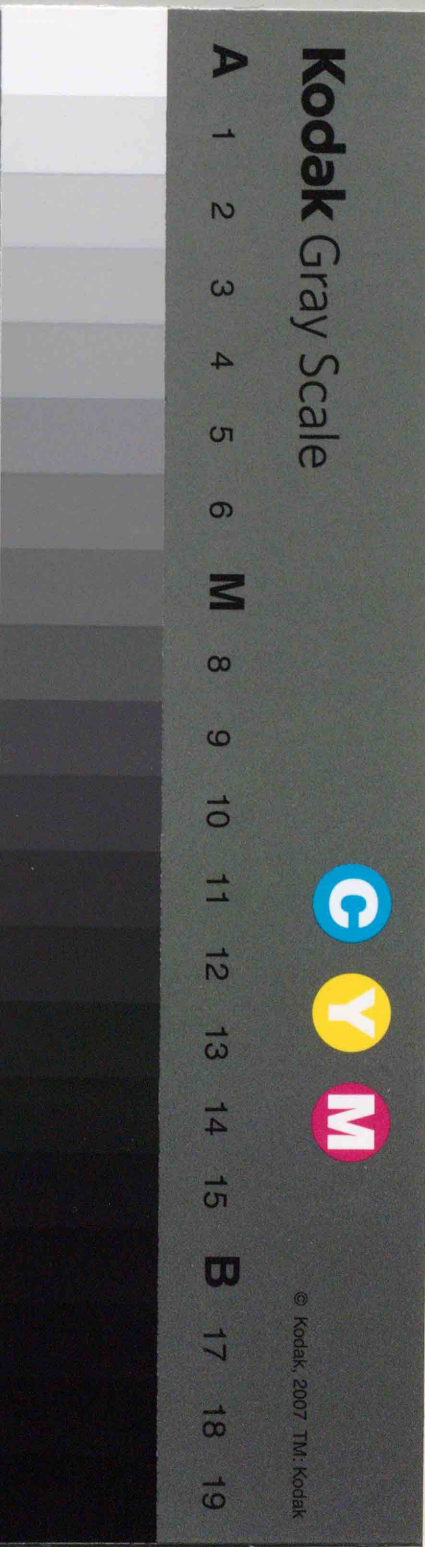
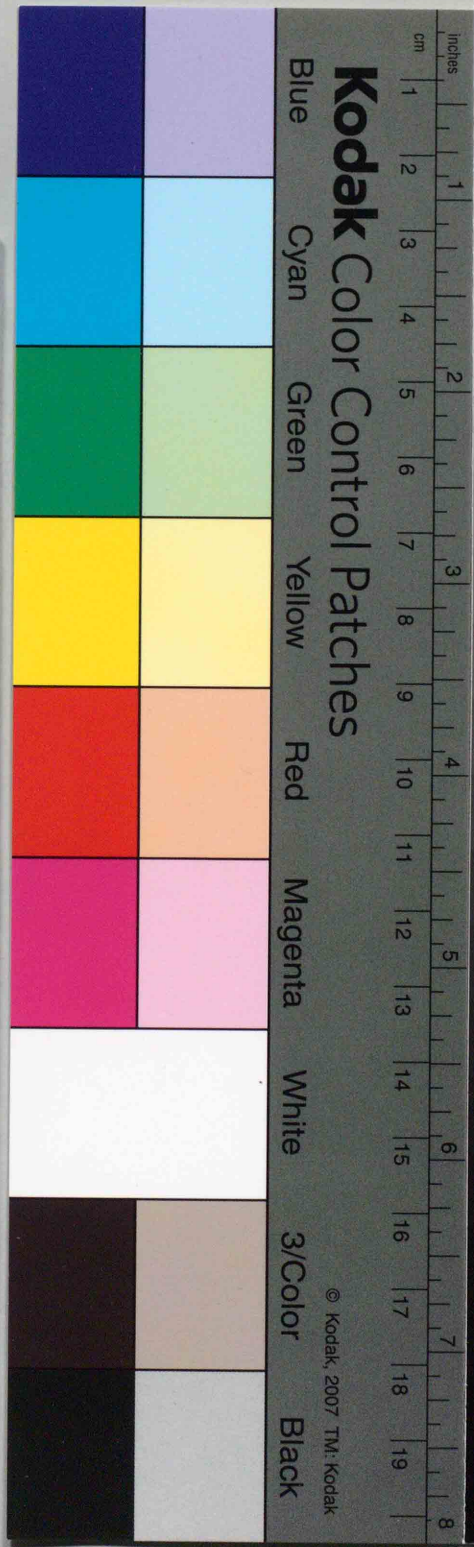


白井

中等國文讀本 落合直文編 卷一

375.9  
Oc8  
資料室



30300 ✓

教科書文庫

3
810
4-1899
20003
01455

M32  
1899

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759  
008

廣島大學  
古書印圖書

明治三十二年三月九日

文部省檢定濟

尋常中學校國語科用



向井

例言

- 一、本書は、尋常中學校、國語科の教科書に充つるために、編纂せるものなり。されど、師範學校、高等女學校等の教科書にも、適用せらるるやう、特に、注意を加へたり。
- 二、第一學年は、明治時代の文章、第二學年、及び第三學年は、おほかた、徳川時代の文章、第四學年以上は、中古の文章にして、いづれも、流麗正雅、生徒の作文の軌範となるべきものを撰びたり。
- 三、時間は、おほよそ、一週三時間と見積り、各學年に、二卷を用ゐるものとして、通篇十卷とせり。

例言

向井

四、各文章中、第三學年までは、その排列、前後、各、喚應して、孤立することなからしめたれど、第四學年以上は、専ら、文章のまとまりたるものを載せたり。そは、第三學年までは、生徒をして、既得の智識を以て、未得の智識を啓發すること、必要なれど、第四學年以上に至りては、それよりも、むしろ、文章の興味を覺らしむること、必要なればなり。

五、文法、語格、假名づかひ等にして、誤れることの明なるものは、悉く、訂正せり。

六、送りがな、句讀法は、すべて、著者の意に任せて、一定せり。

七、文章中、作者の意をそこなはざるかぎりは、或は、削り或は、加へたるところもあり。そは、隨筆雜錄等の文は、かきすてたるもの多きのみならず、傳寫のあやまりなどもありて、そのまま、取ること能はざればなり。

八、第三學年以下は、題名の下に、作者の氏名、又は、別號を附し、又、その文の終に、出所を附せれど、第四學年以上は、ただ、書名のみをかかけたり。

九、題名の下に、氏名、書名、共になきものは、著者の作なり。こは、自ら、こころよしとせざるところなれど、その事實、極めて、近時の、出來事にして、いまだ、名家の作を見ざればなり。尤も、その他に、傳記文一篇と、譯文二篇とあり。傳

記文のかたは、近時の事實にはあらねど、適當なる文章なく、譯文のかたは、談話を譯したるものは勿論、漢文を譯したるものも、適當なるものなければ、已むを得ず、ここに至れるなり。

十、本書は、二十九年三月にはじめて、刊行せるものなるが、實際、教授する人人の、有益なる注意により、ここに、大に、改訂増補するにいたりぬ。今後、猶、不十分の點あらば、いくたびも、注意を興へられよ。余もまた、いくたびも、改訂増補して、遂に、この書の完全を期せむ。

明治三十二年一月三日

落合直文識

### 中等國文讀本卷一目次

憲法發布

三條實美公その一

三條實美公その二

功臣の末路その一

功臣の末路その二

將碁の盤

精神

黃海の戰その一

黃海の戰その二

高崎 正風

谷 干城

孫氏の書牘を讀む

依田百川

海外の一知己(口語文譯)

加藤弘之

佐久間象山その一

勝安芳

佐久間象山その二

西村茂樹

余が劔術の修業

井上毅

忍耐

堀秀成

ほあそなあと氏を送る詞

那珂通高

學問

落合直亮

田舎人の話

栗本鋤雲

勸學

塙檢校保己一

福澤諭吉

まことの學問

福住正兄

二宮尊徳翁の逸話

榊原芳野

海泥二鯁の談

那珂通高

勤懶二字の説

成島柳北

新燧社製造場を觀る記

大鳥圭介

善く働き善く遊ぶべき論

佐佐木高行

汽車の旅

木村正辭

京都巡覽記

東京大學  
圖書印

## 中等國文讀本卷一

### 憲法發布

明治二十二年二月十一日は、皇祖即位紀元二千五百四十九年の大祝日なり。わがめぐみ深き天皇陛下には、かしこくも、この日を以て、憲法を發布せられぬ。待ちに待ちたる、三千五百萬の臣民のよろこびは、いかに。

この日の式場は、千代田の宮の正殿にして、いとう

るはしう、志つらはせ給へり。中央に、兩陛下の玉座を設け、その左右に、各親王、各華族、百官有司、各國公使等の座を設けたり。朝の間、雪すこし降りしが、やがて、うららかに晴れわたれり。午前八時三十分、天皇陛下には、まづ、賢所ををがませられ、憲法發布のむねをまをしのべさせ給ひ、午前十時、兩陛下には、侍従に、神器をささげまつらしめて、君が代の奏樂のうち、正殿にのどませられ、やがて、玉座につかせ給ふ。三條内大臣、うやうやしく、帝國憲法發布の

詔書をたてまつりしに、陛下には、御聲うるはしく、讀みあげさせ給ふ。やがて、伊藤樞密院議長、帝國憲法をささげまつりぬ。黒田内閣總理大臣、御前に進みいでしに、陛下には、御手づから、それを授けさせ給ふ。總理大臣、跪きて、それをうけ奉りし時は、滿場の群臣、みな、よろこびの色をあらはせり。時に、百一發の祝砲は、さかりに、殿外にひびき、その聲、いといさましく、かくて、ふたたび、君が代の奏樂おこりしが、兩陛下には、まづかに、入御あらせ給ふ。この日、伊勢神宮、

畝傍山、および、月輪の山陵には、特に、勅使をたてさせ給ひて、そのむねをつけさせ給ひ、また、岩倉具視、島津久光、毛利敬親、山内豊信、鍋島直正、大久保利通、木戸孝允の墓にも、そのむねを告げさせ給ふ。かくて、大赦を行はるるはさらなり、西郷隆盛の賊名を除き、正三位を贈らせ給ひ、藤田誠之進、佐久間修理、吉田寅次郎等には、正四位を贈らせ給ひ、また、全国の八十歳以上の男女には、金を賜ふなど、ひろき御惠のほど、いたりおよびぬところもなし。

午後零時三十分、兩陛下には、青山の觀兵式に臨ませ給ふ。その行幸ををがみまつらむと、御通輦のみちみちは、人を以て山をきづけり。この夕、百官有司に、讌を賜ひ、夜に入りて、舞樂などあり。

あはれ、他の國國にて、憲法を發布するや、常に、革命擾亂のあまり、腥き風を吹かせ、血の雨をふらするが例なり。さるを、和氣洋洋のうちにかかる大典をあげられぬ。われわれは、多言せず、ただ、かかるめでたき國體は、他に、また、あるかなきかを問はむのみ。



三條實美公その一

三條實美公は、實萬公の二男なり。天保八年二月八日、京都に生る。幼にして、よく禮度を知り、舉動きはめて、おだやかなり。父公、夙に、勤王の志あつかりしが、公、その志をつぎ、常に、大義を唱ふ。文久二年八月、近衛中將に補せられ、つぎて、また、從三位に叙せられ、中納言に任ぜられぬ。この時にあたり、海内、漸く多事、外は、外人、頻に、交通をもとめ、内は、志士、東西に奔走するなど、物情恟恟たり。この年の十一月、公、江

戸に下りぬ。こは、幕府に向ひて、政體改革の旨を傳へたるなり。あくる年の三月、將軍家茂上洛、朝廷に於て、攘夷のことを議決せり。かくときくや、無賴の徒、機に乗じて事をなさむと、陸續、上京せり。公、朝廷の安危を慮り、有志の士を集めて、御親兵を組織し、みづから、都督の任にあたりぬ。幕府、公をはじめ、勤王の諸卿を惡み、ひそかに、それを讒せしが、朝議には、かに變じて、公等の參朝をとごむるにいたれり。ここに、公は、御親兵を率ゐて、大佛に退きぬ。東久世、錦

小路壬生の諸卿、みな來り會す。長州の藩士、久坂通武等、その冤を訴へしかど、きかれず。公等、やむを得ず、東久世以下六卿と共に、長州におちゆきぬ。これ、實に、八月十八日なり。かくて、長州にあること數月、たまたま、藩論、二にわかれ、大に、紛紜をいたせるのみならず、開港佐幕の論のかた、やや、勢力を得るに至りしかば、公等、また、筑前に落ち行きぬ。同年、將軍家茂薨じ、慶喜職をつぐ。やがて、大政を奉還せしが、ここに、はじめて、王政は復古せり。慶應三年十二月、

公等をゆるして、上京せしむ。

三條實美公その二

明治元年正月、副總裁となり、外國事務總督を兼ねぬ。二月、大納言に進みしが、四月に至り、又、左近衛大將に任せられ、從一位に叙せられぬ。十月、親征のことあり。公、關東大監察使となり、鳳輦に隨ひて、江戸に赴きぬ。つづいて、都を江戸にうつす。公、さらに、關八州鎮將を兼ねぬ。二年五月、勤王の功臣を賞せられしが、公には、特に、永世祿として、五千石を賜ふ。四年七

月、太政大臣に任じ、神祇伯宣教長官を兼ねぬ。六年、廟堂に、征韓非征韓の議起れり。討つべしといふは、西郷隆盛、副島種臣、後藤象次郎、板垣退助、江藤新平等なり。討つべからずといふは、岩倉具視、大久保利通、木戸孝允、大隈重信、大木喬任等なり。議論沸騰、容易に決せず。公、たまたま病を以て、邸にあり。車駕、親臨して、諮詢せさせ給ふことあり。隆盛以下、その説の行はれざるを以て、遂に、職を辭す。その年、公、骸骨を乞ふ。ゆるされず。十年一月、隆盛、遂に、兵を九州にあ

ぐ。公、利通、孝允等と、日夜、鎮撫の方略を議し、かつ、その事務をも總理せられしに、歳をこえずして、賊平ぎぬ。その後、十七年七月、偉勳によりて、公爵を授けられしが、その前に、大勳位に叙せられ、また、賞勳局總裁、修史局總裁、皇居御造營事務總裁などをも兼ねられき。十八年の冬、官制の改革あり。時に、公は、太政大臣をやめて、さらに、内大臣となり、爾後、専ら、内部にありて、輔弼の任をつくされぬ。かの二十二年の憲法發布の如き、かの二十三年の帝國議會開會

の如き、皆、公のあづかりて力ありしことは、人のよく知るころなり。二十四年二月の初めつかたふと、病に罹られぬ。その十八日、陛下、遽に、その邸に行幸し給ひ、特に、位一級を進め給ひしが、その日、薨ず。年五十五。勅して、三日間、朝を廢し、やがて、國葬を以て、音羽の護國寺に葬られぬ。

功臣の末路その一

維新の功臣の中にて、その最なるものは、誰なるかと問はば、をさなき子も、猶、西郷隆盛なりと答へむ。

隆盛は、まことに、豪傑の士なり。陸軍大將兼參議たりしが、かの征韓論の行はれざるがために、職を辭し、遂に、甕島にかへれり。ここに、世の人、こは、ただごとにはあらじ、必ずや、大事おこらむと、さわぎあへり。佐賀の亂、熊本の亂、秋月の亂、みな、この隆盛をたのみて起れるなり。されど、隆盛は、さらに顧みず、唯、私學校に學生を集め、武を練り、兵を磨きて、時を待てり。

政府は、甕島なる隆盛のふるまひの、ただならぬを

知り、かしこなる砲兵屬廠及び造船所の彈藥器械を、大坂へうつさむと試みたり。こはこれ、九年のくれつかたなりしが、あくる年の一月三十日、私學校黨、砲兵屬廠、造船所の彈藥器械を掠め、また郵便汽船をおしとどめて、兵を擧ぐべきところがまへす。たまたま、警視廳の警部中原某等二十一人、覽島に歸省せり。隆盛等、それを間者なりとなし、大に、政府にただすところあらむとて、兵一萬五千を率ゐ、二月十五日、覽島を出で立つ。縣令大山綱良、官金を出だ

して、その軍資にあてたり。

この時、天皇陛下は、西京におはせしが、覽島になどなく、おだやかならぬよしをきこしめして、大御心をいためさせ給ふこと、一方ならず。やがて、海軍大輔河村純義、内務少輔林友幸を遣りて、そのありさまを見しめ給ふ。純義等、軍艦に乗りて、かしこに至り、大山綱良にあひて、種種、さとするところありしが、聽かず。かつ、暴徒、兵器を携へて、その艦にせまるなご、謀反のさま、明なりしかば、直に、かへりきて、その

むねを奏す。

ここに、二月十九日、有栖川熾仁親王を征討總督とし、陸軍中將山縣有朋、海軍中將河村純義を參軍とし、野津鎮雄、山田顯義、曾我祐準、三浦梧樓、大山巖、三好重臣の各少將及び、大警視川路利良、陸軍大佐高島鞆之助等をして、各旅團の兵を率ゐ、二十日、東京を出でたたしむ。

この時、熊本鎮臺の司令長官は、谷干城なり。賊軍、熊本をよぎりて、東の方へ上るときこえしかば、こ

ろどころに、兵をやりて、その備をなす。二十一日、熊本鎮臺の兵、川尻にて、賊にあひ、ここに、はじめて、戦を開きたり。賊軍、ただちに、熊本城に迫り、四方よりはげしく攻む。城兵、よく戦ふ。されど、他に、援兵もなかりしかば、遂に、重圍のうちに陥れり。

二十四日、征討總督の官、大坂を出でたたせ給ふ。二十六日、本營を福岡におき、進みて、熊本城を援はむとす。賊、これを植木、木葉のところどころに迎へて戦ふ。官軍利あらず。さらに、兵を増して、南關、または、

高瀬川に戦ひしが、賊遂に引き退きぬ。官軍勢を得て、田原坂を攻む。賊軍よく戦ひ、兩軍の死屍、山の如し。三月三日、官軍、吉次越より進み、賊將篠原國幹を斃す。されど、賊軍、少しも屈せず、かたく、田原坂を守りて退かず。

功臣の末路 その二

陸軍中將黒田清隆、柳原前光と共に、勅を承りて、薩摩に下り、島津久光を論し、大山綱良を捕ふ。歸途、清隆は、征討參軍となり、肥後の八代より上陸して、賊

の後をつきしが、賊は、前後より、兵をうけて、にげまよふ。ここに、田原坂、植木、山鹿、みな、官軍のものとなり。れり。

山田顯義、川路利良等、黒田清隆と、兵をあはせて、熊本城をすくはむと、八代より、北をさして進む。この時、熊本城のありさまは、いかに。賊に圍まるること五旬、糧食つき、彈丸つき、また、すべきやうもなかりき。なみなみの人人ならむには、出でて、賊に降りたらむを、谷干城をはじめ、皆、死を以て守れり。三

月もすぎて、四月になりぬ。その八日、宇土の方にあたり、はるかに砲の音せしが、陸軍少佐奥保鞏、一隊を率ゐて、城を出で、十重に、二十重に、かこめる賊軍をきりぬき、遂に、宇土に出でて、官軍に合す。ここに、はじめて、城中のありさまを聞くを得たり、陸軍中佐山川浩、一隊を率ゐ、こはまた、外部より賊軍の中をきりぬきて、遂に、熊本城に入りぬ。ここに、はじめて、連絡を通ずるを得たり。官軍、ますます、振ひ、賊軍、いよいよ、衰ふ。熊本の賊、うちやぶられ、日向と甕島

とをさして、引きあげぬ。人吉、重岡、出水、都城、佐土原、延岡など、日日、戦争たえず。薩、肥、日、隅、豊の山野、砲聲のきこえざるところもなし。

七月二十四日、官軍、都城をとり、つぎて、佐土原、延岡の諸城を陥れぬ。この時や、賊の將士、おほく討たれたれど、なほ、萬人に下らず。賊將、桐野利秋、別府晋助、村田新八等、をまとめて、長井、熊田などのところどころを保ちて、よく戦ふ。八月十八日、官軍、大舉、四方より、賊軍を圍む。隆盛、利秋、夜のまぎれに、急に、官



軍の陣をつく。官軍支へ得ざる程に、彼は、はやくも、かこみをやぶりて、西に走りぬ。官軍追ひ討ちたれども及ばず。賊遂に、甕島に入りぬ。かくて、城山にたてこもり、みな、死をきはめて、官軍の攻めこむを待てり。官軍、急に討たば、將士を失ふこと、多からむと、ただ、四方を圍みて、せまらず。かくすること、十日あまり、九月二十四日、夜のあけはなるるころ、大舉して進み討ちしに、隆盛をはじめ、利秋、新八、みな、討死す。あはれ、維新の功臣、遂に、城山松

の下露と消えぬ。みづから招ぎたることとはいへ、また、一滴の涙なからざるを得ざるなり。

將碁の盤

高崎 正風

將碁の盤の、	くみたてを、
心にとめて、	たれも見よ、
金 銀 桂 馬、	飛車や角行、
香車歩兵と、	それぞれに、
役目さだめて、	おのが行く、
道ひとすぢの、	ほかは見ず、

前後左右に、  
 擒と成るも、  
 攻め討たるも、  
 一命捨てて、  
 ひとりの王を、  
 ひとつの盤を、

かけ廻り、  
 ものとせず、  
 かへりみず、  
 はたらくも、  
 護るため、  
 保つため。

精神

谷 干城

われわれ日本人は、日本魂といふ最も鞏固なる精神をもてり。この精神をもちて、この日本國を護り

來りしかば、古より、他國の侮をうけざるのみならず、世界無比の國なりといふ名譽をさへ得るに至れるなり。今後、この名譽を保たむも、失はむも、この精神の如何にあるべきを、おひおひ、この精神を持つる者のすくなくなりゆくは、いかにぞや。

日本魂といふ精神をもてばこそ、まことの日本人なれ。これなくば、形こそあれ、まことの日本人とはいふべからず。何となれば、さる人は、亞米利加へ行かむには、亞米利加人となり、英吉利へ渡らむには、

英吉利人となるべければなり。むかし、山崎闇齋といふ學者ありき。ある時、その弟子に向ひ、若し、孔子、孟子が、大將となりて、この國に攻め來らば、いかにかすると問ひしに、弟子ども、答ふる能はず。闇齋、容をあらため、何をか躊躇する。たとひ、孔子、孟子なりとも、この國に害をなさむには、直に、うちはらふべし。これ、やがて、孔子、孟子の教ならずやといへり。また、物徂徠といふ學者ありき。こは、きはめたる支那崇拜者にて、なにごとも、かれを尊ぶあまり、遂に、東

夷の物茂卿と自稱して、怪まざるにいたれり。闇齋といひ、徂徠といひ、おなじく、漢書を讀みたるものなり。さるに、そのいふところ、かく、異なるは、一は、この精神を保ち、一は、この精神を失ひたるがためなり。この徂徠のごとき人のみ多くならむには、この日本國の前途をいかにかせむ。世人は、ともすれば、富國強兵を口にせり。余、おもふに、いかに、學理は、進歩するも、實業は、發達するも、これに、従事する人にして、この精神を失はむには、國

家にとりて、何の利益もなからむ。また、海に、千萬の  
艦艦を浮べ、陸に、億萬の巨砲をならぶるも、それを  
運用する人にして、この精神をからむには、ただ、一  
の形容の具に過ぎざらむ。いひかふれば、富國策も、  
強兵論も、日本魂といふ精神を定めたる後にすべ  
きなり。それを定めざるうちは、到底、その實をあぐ  
ること能はざらむ。要するに、日本魂ありて、はじめ  
て、日本人なり。日本人ありて、はじめて、日本國なり。  
われわれ日本人たるもの、この日本魂といふ精神

を失ひて可ならむや。(萩舎雜錄)

黃海の戰 その一

明治廿七年九月の十日、わが艦隊は、山縣陸軍大將  
を載せたる、運送船をまもりつつ、佐世保を發し、十  
二日、仁川につきぬ。これより、艦隊は、大同江のかた  
へ向へり。こは、平壤攻撃のをり、敵の海軍のおしよ  
せ來らむを、いましめむとてなり。

十五日は、平壤攻撃の日なり。敵の艦隊、いまや來る  
と、まちうけたれど、遂に、そのかげだにも見えざり

けり。ここに、わが艦隊は、松島を旗艦として、千代田、  
嚴島、橋立、比叡、扶桑、赤城、および、西京丸の八艦と、第  
一遊撃隊、吉野、高千穂、秋津洲、浪速の四艦とを合せ  
て、聯合艦隊をつくり、十七日、海洋島へ向ひぬ。

この日、空、よく晴れ、波、いと靜なり。赤城は、このあた  
りの海を、ここかしこ、探りたれど、敵を見出ださざ  
りしが、午前十一時ごろにいたり、はるかに、大鹿島  
のかたに、黒烟ひとむら、たなびくを見とめぬ。すは  
や、敵こそきたるなれ、わが海軍の技倆を見せむは、

ここなりとて、各艦の兵士、いさみて、號令の下らむ  
を待てり。

敵艦、いよいよ、近づきぬ。はじめは、六艘ならむと思  
ひしが、まもなく、その數はまさりぬ。やがて、艦のか  
たちも、見ゆるやうなりたれば、そをいかにと、ひと  
みを定むるに、こはこれ、北洋艦隊にて、名高き、定遠、  
鎮遠、來遠、致遠、揚威、超勇、靖遠、經遠、威遠、濟遠、廣丙、平  
遠の十二艘なりけり。かくて、別に、水雷艇、六七艘を  
去たがへたり。

かくと知るや、わが艦隊は、旗艦、松島の號令に志たがひ、そのかたち、長蛇のごとく、單縱陣をつくりぬ。そのうち、赤城と西京とは、一は、小艦、一は、もと、商船なりしかば、共に、敵の正面をさけしめむとて、全隊の左側にあらしむ。敵は、定遠、旗艦となりて、鎮遠とともに、位置を、全隊の中央に占め、濟遠、廣丙、平遠をして、ことさらに、本隊をはなれて、西にむかはしむ。かくて、こなた、かなたの間、殆ど、六千米突ばかりになるや、敵は、はや、發砲をはじめぬ。われは、その距離

の遠きを知り、容易に應ぜず、三千米突ばかりになりて、はじめ、うち出だせり。この時、零時二十分なり。これより、砲聲、雷の如く轟き、煙は、海上をおほひて、咫尺も辨ぜざりしが、互に、陣形をかへつつ、戦ひあへり。

赤城、比叡は、速力おそきをもて、いづれも、陣列におくれ、敵のために圍まれぬ。この間、經遠は、比叡へむけて、水雷を放ちしこと、二たびなれど、一たびもあたらざりき。一時二十分、敵の超勇、揚威は、われより

うちし弾丸のために、火を發して走れり。この時、わが比叡にも、火おこりしかど、直に、消し止めたり。敵は、赤城の小なるを侮りて、いよいよ、これに迫り來ぬ。こなたは、屈せず、かれにあたる。艦長坂元少佐は、まこと、この時に、戰死せり。されど、艦員よく、戰ひしをもて、却りて、敵をくるしめたり。來遠の如きは、このために、また、火を發して、のがれ去れり。戰は、ますます、はげしくなりぬ。二時十五分、敵の平遠、廣丙、いよいよ、われに迫りきぬ。われは、いたく、それを砲撃せ

しに、平遠、また、火を發して走れり。二時二十三分、わが大砲は、超勇をうち沈めたりしが、溺れながら、助をこひて叫ぶ聲、砲のひびきと相和せり。やがて、三時にもなりぬ。西京丸、また、敵にかこまれて、いたく、きずつけられしが、樺山軍令部長、將士を勵まして、僅に、遁るることを得たり。三時四分、敵の水雷艇、ひとつふたつ沈むと共に、敵は、やうやう、退かむけしきをあらはせり。われ、すかさず、これを追ひぬ。たちまち、定遠と靖遠とに、火おこれり。靖遠は、それをうち

消してはやくも遁れ去りしが、定遠は、火焰、いよいよ熾んなり。それと見るより、鎮遠、いそぎ來て、そをたすけ、わづかに、沈没をまぬかれしめたり。三時半、敵の巨彈、わが松島にあたり、忽ち、火おこれり。そを、やうやうに消しとめしころ、敵の致遠は、わが彈丸のため、沈みそめぬ。はじめは、右舷の後部よりかたむきしが、ややありて、舷首、まづ没して、艦尾のみ、高く天にむかひ、殆ど、直立しつつ、そのまま、沈みをはりぬ。そを見るや、敵の艦隊は、みだれにみだれ、み

な、遁れ去らむとす。わが第一遊撃隊は、そを追撃して、つひに、來遠をうち沈め、午後五時、たたかひを終へたり。

黃海の戰 その二

この夜、わが艦隊は、なほ、進みて、敵を西北の方に追ひゆきしも、遂に、その行方知れず。夜あけて、海洋島の方にひきかへししに、あなをかし、昨日の戰に逃ぐることを得ざりしか、敵の揚威は、焼けながら、この淺洲に乗り上げ居たり。我、すなはち、外裝水雷



をもて、なぐさみがてらに、こを破壊し、凱歌をうたひつつ、そのままかへりぬ。後にて聞けば、廣甲も、いたく、きずをうけて、大連灣に遁げいりしが、廿三日、わが浪速、秋津洲の偵察に行きしをり、敵、自ら、火をはなちて、焼きすてたりといふ。

この海戦は、實に、かのとらふあるがるの戦以來、はじめての大激戦なりしなり。敵は、名高き艦を集めたるに、水雷艇さへ、あまた備へたり。われには、一の水雷艇なきのみか、艦の數も、かれにおとれり。され

ど、戦の勝敗は、ふねにあらずして、人にあり。かれは、その艦、五つをうしなひしに、われは、ことごとく、無事なりけり。こは、皆、伊東司令長官の指揮のよろしきを得たるものにて、その功や、ながく、海戦史上に残らむ。さて、この戦において、最も苦みしわが艦は、比叡、赤城、および、西京丸の三つなり。

比叡は、體ふるく、速力おそきをもて、進退自由ならず、つねに、列外にありて戦ひしに、東洋第一の甲鐵艦定遠にあひし時のごとき、その危さ、なにかた

とへむ。かくて、われよりうち出だす彈丸は、よく、これにあたりしも、そのふね、堅きがため、むなしく、飛びかへるのみ。かかるさまなるに、敵と、よく對峙して、その歩をゆづらざりしは、ひとへに、艦長櫻井少佐の功とやいふべからむ。

赤城は、噸數、わづかに、六百なり。もとより、戦に堪ふべき艦にあらず。艦長坂元少佐は、はじめより、死を期したりけむ。大膽にも、われに十倍せる敵艦、定遠、鎮遠の間に馳せ戦へり。かくて、敵の彈丸、雨のごと

く注ぎ來るを、ものともせず、つねに、甲板にありて、號令をくだせり。をりしも、巨彈來りて破裂す。こはいかにと、いふまもなく、あまたの兵士、血けぶりと共にたふれぬ。三時間餘の戦、かかること、幾度なるかを知らず。檣もくだけ、器もそこなはれぬ。今は、なにとてためらはむ。敵の艦につきあたりて、もろ共に碎けむと、少佐は決心せり。あはや、わが艦、いましも定遠を衝かむとす。さすがの敵も、これには怖れけむ。にげまごひつつ、わづかに、こを避け得たり。わ

れは、勇氣、ますますくはほり、滿艦、相勵みて、戦ひしが、たちまち、一發の巨彈、すさまじく、少佐の半身を奪ひ去りぬ。ひとりの水兵、さけびていはく、艦長の屍體、海中におちたり、うしなひては、我艦の耻なりと、ただちに、水に飛び入りぬ。やがて、屍をひろひ上げしが、見れば、胴の下、半のみにて、上部はなかりけり。あなあはれ、少佐の最後。されど、君の死は、日本海軍の名譽にして、その名は、實に、萬國にひびきわたらむ。

西京丸は、商船なり。さるを、他の戦艦におとらず、よく戦ひしは、これ、樺山中將の豪膽なるによるなり。その舵機を破られし時の如き、はや、戦ふべき力を失ひしかば、戦列を離れむとて、走りいでしに、定遠鎮遠は、おのれに當りて、共にくだけむとするなるべしと思ひて、その路を開きたり。そこを過ぎ行かむとする折しも、敵より、忽ち、水雷を放ちぬ。そは、沈みたり。また、放ちぬ。中將も、この時は、わが事終ると叫びぬ。されど、その距離をや誤りけむ、ふかく、船底

をくぐりぬけて、はるかあなたに浮び出でたり。三たび放ちぬ。こたびは、敵も味方も、共に、命中を期してありしが、中將は、一兵士に命じて發砲せしむ。彈丸は、あやまたず、かの水雷にあたると見えしが、忽に、破裂せり。ここに、みなみな、虎穴を遁れたるこころちして、そのまま、假根據地にひきあげたり。この夜、空澄み、月きよし。滿艦の將士、やがて、祝宴を舵樓に張る。樺山中將以下、みな、興に乗じて、曉まで、杯をとれり。

孫氏の書牘を讀む

依田 百川

英雄豪傑も、婦人のためには、勇をうしなひて、思はぬ悪名を取ること、和漢、そのためし少なからず。されど、わが國には、その夫を勵まして、蝦夷の兵を破らしめたる下毛野の形名の妻の如きもあり。この頃、牙山に敗れて、婦人の衣を身に纏ひ、逃げ去りたる清國の提督葉志超の妻孫氏の、その夫におくれりといふ書を見しが、そは、未だ、戦の起らざりし時にありて、客地の寒暑をおもひやり、朝夕のいたつ

きを慰めたるものなり。いとも憐になさけ深し。されど、末の詞に、わが夫は、年はたちのころより、戰場にいでまして、多くの敵を破り給へれど、今は、よる波の五十のうへに越え給へり。御心は、いかに猛くとも、いかでか、昔のごとくおはしますべき。危をかへりみず、人の先をばかけ給ふな。御身をつつしみて、よきたよりをきかせ給へとあり。女子の情は、さもありぬべけれども、形名の妻には、いたくもおどりておぼゆるかな。さればこそ、志超、この詞に心く

らみ、力ぬけて、身をのがるることにもなりたるなれ。わが國の將士の妻は、さはあらじ。老木の櫻も、なごてか春におくれ給ふべき。齋藤の別當ときこえし人も、篠原の草の露と消えにしかど、その名は、今もかぐはしくこそきこゆれ。決して決して、わかき人人におくれ給ふなとこそあらめ。孫氏に、わづかばかりにても、大和心あらしめば、志超、かかるいまはしき名を取らむや。それにつけてもさかしきは、わが形名の妻なるかな。(國文)

海外の一知己（口語文譯）

一夕、勝海舟翁を氷川邸に訪うた、ところが、はなしは、たまたま、丁汝昌のことにおよんだが、翁は、口を開いて、『丁汝昌は、あれが、海外の一知己だつたが、日清戦争の時に、どうとう、自殺してしまつた。當時、あれは、今昔の感にたへず、病氣を推して、こんな文章をも書きかけた。』

二十八年二月十六日、丁汝昌、その率ゐるところの軍艦に、降旗をかかけて、われに降るといふ。ある人、その可否得失を論じて、余が意見を問ふ。余、思ふむねありて、答へず。その後、兩三日、丁は、いよいよ、降るべき順序を終へ、自刃して死せりといふ。余、かの心裏を思ひ、嘆息、おくこと能はず。思へ

ば、彼が、わが國に來りし時、余が家を尋ねて、共に、相語れり。ここまで書いたところが、胸中の感慨と、病餘の衰弱とで、頭痛がまだしたものだから、已むを得ず、それなりに去た。今、そのつづきを口で話さうわい。

その時、丁が、支那當時の海軍についていふには、今日、我國の海軍は、いかに、見所がなく、お耻かしき次第だが、拙者は、ただ、將來に期する所があつて、いささか、みづから、奮勵して居るばかりだ。拙者は、曾て、李氏の命を受けて、二百名の生徒を連れて、英國へ留學し、同國の士官について、少しく、海軍のことを學び、歸朝の上、この二百名の生徒と共に、やうやう、今日の海軍を創設したけれども、これは、ただ、見識に過ぎない。その事は、李氏も承知と見えて、今日の海軍は、何の役にも立た

ない、ただ、今後十年を期して、大成すべきのだと、常常、われわれにいうて居る。拙者は、曾て、貴著海軍歴史を讀んで、君が、幕末から王政維新の際にかけて、海軍を經營せられたる關歴と、偉勳とを承知し、拙者が今日の境遇にくらべて、去きりに、敬慕致し居るというた。丁のいふところは、その語は、甚だ、謙遜で、その望は、甚だ、遠大であるから、おれも、感心して、海外に、一知己を得たのをよろこび、いろいろ、こなたの考をもはなした。

その後、軍艦に招かれて、提督の禮で待遇せられ、いろいろ、丁寧な饗應を受けたが、おれは、一首の和歌を、一日の寶劍に添へて、彼に贈つた。そして、艦内、残る限なく、見物したが、一體の事が、なかなか整頓して、日常、用ゐる品などは、一つも、外國製

のを用ゐず、支那製ばかり用ゐて居た所などは、實に、感心したよ。今後も、すべて、かかる心がけが、肝要なりなというたに、彼は、よくききいれた。

おれと丁との間には、こんな關係があるものだから、日清戰爭の時分には、おもひは、始終、北洋艦隊の上に馳せて、敵ながらも、その消息が氣にかかつた。また、あの時の聯合艦隊の司令官であつた伊東中將も、昔、神戸で、おれの塾に居た緣故から、一生一度ともいふべき晴の舞臺に上つたからは、どうか、日本海軍の名譽と、一身の手柄とを立てさせたいと思つて、當時、おれの胸は、あちらを思ひ、こちらを思ひ、殆ど、千々に碎けたよ。

然るに、威海衛の海戦は、敵味方とも、この上なき名譽を輝し、

世界の海戦史上に、一と花咲かせたと聞いて、おれは、實に、嬉しかつた。伊東中將のことはいはねぬ。丁が、あの時の處置は、實に、一點の非難すべき所もなく、海戦上に、一箇の新事例を教へたというてよい。陸戦の時、あの様な場合に處する例は、これまで、いくらも、あつたけれど、世界に、海戦といふほどの海戦が、昔からなく、従うて、あんな場合も少ないのだから、これに處する方法の如きも、倣ふべき先例がなかつた。丁の處置は、實に、戦鬪力を失うた艦長が、取るべき模範を示したばかりでなく、蕭條たる海戦史の秋の野に、一點の紅花を點じたのだ。

凡そ、人間が、何事にか激した時には、死ぬるのは、譯もない事だらう。併し、よくよく、事局の前後を達觀して、十分に、善後の

策を立て、然る後、從容として、死につくのは、決して、容易の事ではあるまい。丁汝昌の境遇の如きは、部下には、數年來、苦心養成した所の、他日、支那海軍の要素たるべき、かの二百名の秀才があり、傍には、いろいろ、面倒なことをいひ、出だす雇外人があり、これ等の處置をつけねばならぬ。寧ろ、斃れるまで奮戦しようかといふと、十年素養の二百名を殺さなければならぬ。それでは、降参しようかといふと、自分の良心は、どうしても許さない。そこで、丁は、沈思熟考、支那海軍の將來を慮り、自分の面目をも立て、かつは、雇外人への義理から、一身と、軍艦とを犠牲にして顧みなかつたのだ。その心の中は、實に憫むべきではないか。』というて、翁は、涙ぐまれた。そのはなしのあとを聞きたくも思ふたが、日も、全く、暮れたゆゑ、暇乞



して歸途についた。(海舟翁談話筆記)

一夕、勝海舟翁を氷川邸に訪ふ。談、たまたま、丁汝昌のことにおよび。翁、丁汝昌は、余が海外の一知己なりしが、日清戦争の時、遂に、自殺せり。當時、余は、今昔の感に堪へず、一篇の文章をつづらむと、病をつとめて、筆とりぬ。

二十八年二月十六日、丁汝昌、その率ゐるところの軍艦に、降旗をかかげて、我に降るといふ。ある人、その可否得失を論じて、余が意見を問ふ。余、思

ふむねありて、答へず。その後、兩三日、丁は、いよいよ、降るべき順序を終へ、自刃して死せりといふ。余、彼の心裏を思ひ、歎息、おくこと能はず。思へば、彼が、わが國に來りし時、余が家を尋ねて、共に、相語れり。

と書きかけたりしが、胸中の感慨と、病餘の衰弱とにて、頭痛はげしく、ために、中途にしてやみぬ。今日、幸に、君の訪ふあり、そのつづきを語らむとて、語られぬ。

さて、その時、彼は、支那海軍につきて、いへることあり。今日、わが國の海軍は、極めて、幼稚なり。生は、ただ、將來に期するところありて、みづから、奮勵して、怠らざるのみ。生は、はやく、李氏の命をうけ、二百名の生徒を伴ひ、英國に留學し、かしこの士官につきて、少しく、海軍のことを學びたり。歸朝後、その二百名の生徒と共に、漸く、今日の海軍は、創設したれども、いまだ、兒戲の誹は、免れざらむ。この事は、李氏も知れりと見えて、常に、生等に向ひ、今日の海軍は、今後

十年を期して、大成すべきなりといへり。まことに、然らむ。生は、曾て、貴著の海軍歴史を讀み、君の人となりを知れり。君が、幕末より、王政維新の際にかけ、海軍を經營せられたる閱歷と、偉勳とは、生が、今日の境遇にくらべて、切に、敬慕するところなり。生のために、なにかと示教するところあれといふ。彼のいふところ、その語は、甚だ、謙遜にして、その望は、甚だ、遠大なるが故、余も、感心のあまり、種種、愚考を語りきかせたり。

その後、余を軍艦に招ぎ、遇するに、提督の禮を以てせり。余は、和歌をそへて、寶劍一口を贈りぬ。かくて、艦内残るくまなく、見めぐりしに、諸事よく、整頓せり。ことに、感服せしは、日常の物品など、一も、外國製のものを用ゐざることなり。余は、その用意の着實なることを賞すと共に、今後も、すべて、さる方針をとらざるべからざるむねを語りしに、彼、一一、うなづきぬ。

余と彼との間には、かかる關係あり。故に、日清戰爭

の時は、余が思は、終始、北洋艦隊の上に馳せて、敵ながら、その消息が氣にかかれり。かくて、また、わが聯合艦隊の司令官伊東中將は、曾て、神戸にて、余が塾に居たりし縁故あるものなり。かの時や、一生一度ともいふべき、はれの舞臺に上れるなれば、いかにもして、日本海軍の名譽と、彼一身の功績とを立てさせまほしと、彼方此方を思ひつつ、當時、余が胸は、殆ど、千千に碎けたり。

さるに、威海衛の海戦は、敵味方とも、この上なき名

譽を輝したりと聞きたる時の、余のよろこびはいかに。伊東中將のことはいはず、丁が、かの時の處置は、いささかも、難ずべきところなきのみならず、海戦上に、一個の新事例を教へたるものなり。陸戦にありては、さる場合に處する例すくなからず。されど、海軍にいたりては、世界に、さほどの海戦なく、従ひて、さる場合もあらねば、さる例もあらざりしなり。かへすがへすも、丁の、かの處置は、戰鬥力を失ひたる艦長の取るべき模範を示したるものにて、蕭

條たる海戦史の秋の野に、一の紅花を點じたるものといふべからむ。

すべて、人は、激したる時にありて、死ぬといふことは、難からじ。さりながら、よく、事局の前後を達觀して、十分に、善後の策を立て、さて、後に、從容として、死に就くは、容易の事にはあらざらむ。丁の境遇の如きは、至難中の至難なり。なにとなれば、その部下には、數年來、苦心養成したるところの、他日、支那海軍の要素たるべき、かの二百名の秀才あり。また、傍に

は、種種、苦情をいひ出だす雇外國人あり。奮戦して斃れむか、十年素養の二百名を殺すをいかにかせむ。雇外國人への義理を缺くをいかにかせむ。降参してながらへむか、自分の良心のゆるさぬをいかにかせむ。支那海軍軍人の不名譽をいかにかせむ。ここに、彼は、沈思熟考、支那海軍の將來を慮り、自分の面目をも保ち、かつは、雇外國人への義理をも立てむと、一身と軍艦とを犠牲にして、顧みざりしなり。その心のうち、實に、憫むべきにあらずやといひ

て、翁は、涙ぐまれぬ。その談話の末、猶、ゆかしかりしかど、日、全く、暮れたれば、暇を告げて、たち出でぬ。

佐久間象山その一

加藤 弘之

佐久間先生は、實名を啓、通稱を修理といひ、號を象山といへり。松代藩の士なり。佐藤一齋翁の門に入りて、儒學を修め、歸藩の後、藩主に寵用せられしが、三十餘歳にして、西洋の兵學砲術の必要を悟り、それより、蘭學を修め、専ら、原書につきて研究し、これを門人に傳へたり。そのころ、諸藩士の、先生の名を

聞きて、その門に入るもの多く、中津藩奥平家の如きは、兵制の改革、操練の指導を、全く、先生に囑託するにいたれり。

余が、先生の門に入りしは、先生の四十二三歳のころなり。先生は、總髮にして、長身、中肉、顔容、頗る、威嚴を具したれど、又、自ら、温和なるところあり。そのころは、木挽町に住せられしが、家にもありても、大抵、紋付を着し、羽織、袴を用ゐられたり。午前は、八疊ばかりなる書齋の、卷冊、狼籍たる中に坐して、和、漢、蘭の

書を読み、午後、門人の集れる時には、或は、蘭書を講じ、或は、練兵、足並の指導をなし、それ、終れる後は、門生と共に、四方山の話などをして、餘念なく、談笑せられたりしその風采は、今なほ、余が眼中にとどまりて、遠く、四十餘年前の事とは思はれず。又、毎月、兩三回は、奥平家の二本榎の邸にて、小隊、大隊の操練をなして、自ら、指揮せられたり。先生は、深く、易を信ぜられたりと見え、易理を以て、砲術の理を説かむとて、砲卦といへる小冊子を著されたり。余は、一本

を寫して、久しく所持せしが、いかになりけむ、今は、失ひて、手元にあらず。當時は、洋學といへども、醫學、兵學位のことにして、未だ、その他の書を讀まざる時節なれば、先生も、今日の哲學、社會學等、その他、諸學科のことにつきては、その大要をも窺はれたることなく、西洋の優れるところは、特に、技藝にありと思はれたるが如し。

佐久間象山 その二

その後、吉田松陰の外國渡航を周旋したる罪を以

て、幕府の命にて、藩地に幽囚せられぬ。數年の後、外國との關係、ますます、危急に迫りたりしが、幕府は、更に、先生の罪を免じて、顧問となしたり。それより、京都に赴き、専ら、一橋卿の命を奉じて、種種、畫策するところありしが、一日、西洋馬具をおきたる馬に乗りて、市中に出でられし時、刺客に襲はれて、遂に、落命せられぬ。年齢は、五十七八歳とおぼえたり。先生は、はやくより、江戸にても、西洋馬具を用ゐられしが、そのころは、他に、たえて、西洋馬具を用ゐるも

のあらざりしかば、攘夷家は、見る毎に、これを悪み  
きといふ。

先生は、不世出の英傑なり。一儒生にして、夙に、西洋  
兵學、砲術の急務を悟り、はじめて、蘭書について、研  
究せられたること、又、吉田松陰の膽畧を觀破して、  
彼を、西洋に渡航せしめむとせられたること等の  
如き、いかで、凡人の及ぶところならむ。先生をして、  
若し、横死を免れ、維新後、なほ、健全ならしめば、その  
才畧をあらはすもの、實に、非常なりしならむ。世人、

常に、藤田東湖、横井小楠等の人物をほむ。余は、兩氏  
等と面識なきが故に、これを評すること能はずと  
いへども、兩氏の、時務策等につきて、論議せしもの  
を讀むに、先生の識見に及ばざること、甚だ、遠きが  
如し。卑見を以てすれば、先生と西郷南洲とは、性質、  
氣象、性行、風采、學問、事業等、一も、同じきものあらざ  
るのみならず、殆ど、反對の點に立つが如きもの、少  
なからずといへども、唯、その豪傑たるの一點に於  
ては、蓋し、一對と稱するも可ならむか。(經歷談)



余が劔術の修業

勝

安芳

余の若き時、眞に、修業せしものは、劔術のみなり。余が家はもと、劔術の家柄なりしかば、父も、特に、それを奨励せり。余が師は、島田虎之助といふ先生なり。この先生、余に向ひて、當時、世間に行はるる劔術は、ただ、かたばかりなり、折角、稽古せむと思はば、眞正の劔術を稽古すべしといはれぬ。余、その言に感じ、遂に、その塾に寄宿して、自ら、薪水の勞を取りつつ、修業せり。

さて、寒中になるごとに、先生の指圖に従ひ、毎日、稽古の終るをまち、王子權現に行きて、夜稽古をなせり。何時も、まづ、拜殿の礎石に腰をかけて、瞑目沈思、心膽を練磨し、また、起ちて、木劔を振りまはし、かくすること、夜あけまで、五六回、さて後、かへりきて、直に、朝稽古にとりかかれり。はじめのほどは、樹木森森たる社内のならひ、吹き來る風の音も、なにとなく、すさまじく、覺えず、身の毛もよだちたりしが、修業の積むに従ひて、次第に慣れ、後には、却りて、さび

しき中に、また、一種の趣あるやうになれり。  
尤も、時時は、二三の同門生の來りしこともあり。されど、いつも、寒さと、眠さにとに避易して、中途より、近傍の農家に行きて、寝たりしが、余のみは、一度も、さることをなさざりき。思へば、その時は、足袋もはかねば、羽織も着ず、ただ、稽古衣一枚なりしかど、寒さといふことなどは、いかなることなるか、殆ど、知らざりき。今、この老年になりても、身體健に、根氣も強きは、全く、この時の修業の餘慶なり。今の若き人人

よ、暇あらば、劍術は、必ず、修業すべきなり。(菽舎雜錄)

忍 耐

西 村 茂 樹

忍耐とは、俗に、辛抱強しといふことにして、支那にて、堅忍不拔といひ、又、百敗不挫などいふも、皆、これなり。すべて、人間の事業は、手を袖にして、得らるべきものにあらず。路傍に、五穀の生ずることなく、樹木に、金錢の實ることなし。人間の名譽といふものは、皆、辛苦をなし上げたる結果なり。いにしへより、大事を成し、大業を立てたる人にして、いづれも、こ

の徳なきものはなし。そは、代代の歴史に徴して、自ら、知ることを得べし。忍耐の力は、一人に取りては、豪傑と凡人との分るところ、一國に取りては、強盛國と貧弱國との分るところなれば、決して、なほざりにすべきものにあらず。

そもそも、忍耐の力を要するは、平居安樂の時にあらずして、必ず、困難窮厄の地に立つか、或は、志望敗壞せるときか、または、八方より障碍物の來り襲ふ時かにあるべし。かくの如き時に當りては、その害

をなすもの、三あり。一を畏怖といひ、二を他志といひ、三を厭倦といふ。畏怖とは、己が財産を失はむとする時、或は、一身の安全を保ち難き場合に起るものなり。稟性、怯懦なる者は、はじめは、忍耐の志ありといへども、一たび、つまづけば、忽ち、畏怖の心をおこして、遂にその守を失ふことあり。故に、忍耐の志を堅うせむとするには、この畏怖の念を去らざるべからず。次に、他志とは、志を他に轉ずることにて、これ亦、大に、忍耐の害をなすものなり。例へば、ころ

んぶすが、亞米利加をもとむる時にあたり、中途にして、船をかへし、地中海濱の諸國と貿易して、富を求めむなどと考へむか、その志の專一ならざるよりして、終に、虻も蜂もとらざる者となりしならむ。故に、忍耐の志を堅うせむとするには、この他志の念を去らざるべからず。次に、厭倦とは、俗に、三日坊主といふ、これなり。この厭倦の性ある人には、才氣あるものもありて、その志を堅うせば、必ず、事を成し得べきも、厭倦のために、その業を廢するなり。厭

倦は、多く、苦痛、即ち、困難より生ずるものなり。然れども、忍耐の徳は、困難を犯すを常とするものなれば、そのために、厭倦を生ずるやうにては、到底、事業を成し遂ぐることに能はざるなり。故に、忍耐の志を堅うせむとするには、この厭倦の念を去らざるべからず。この三を去らむか、いかなる事か、忍耐しあはざらむ。また、いかなる事業か、成しあはざらむ。(日本道徳論)

ほあそなあど氏を送る詞 井上 毅

余は、一日、朝早く、ぼあそなあご君を、永田町の家に訪ひたりしに、君は、例の如く、文机に倚りて、餘念なく、法條を起草し居られたるが、その顔色、衰へて、常ならずおぼえければ、病やあると問ひしに、病は、かくなむとて、その足を示されたり。見れば、二つの脚共に、水色になりて、腫れふとりたり。余は、なにゆゑに、靜に、養生し給はざるかと問へば、司法大臣と約ありて、某の日までに、若干の箇條を起草し畢へざるべからず。この義務は、病によりて、背くこと能は

ずと答へられたり。余、かつは、驚き、かつは、覺束なく思ひて、いそぎ、山田司法大臣の邸に至り、この由を告げけるに、司法大臣も、ともに驚かれ、即ち、秘書官栗塚君をして、君を訪問せしめ、速に、轉地療養あらむことを勧められけり。君は、約束當事者の命を受けて、はじめて、心おきなく、田舎に轉養せられたり。余は、この時、家にかへり、ひそかに、嘆息していへらく、凡そ、つかさある人人にして、かくまでに、深き義務心に伴へる勉強を以て、いそしみたらむには、立

法事業、并に、諸般の事の擧らざることやあるべきこと。このこと、一小件なれども、余は、將來、ほあそなあと君の名譽ある史傳中の一段とすべき價值ありと信ずるがために、別に臨みて、これを公衆の前に述べ。君の二十年間の立法上の功績のごときは、他の諸君の演述に譲りて、ここにいはず。

余は、實に、ほあそなあと君と、二十年來の友なり。場合によりては、わが師なり。さるを、病のために、饑の席に臨むこと能はざるは、遺憾のきはみなり。今、書

して、君の旅行の安全を祝し、併せて、左の詞を以て、君を饒す。

余は、君が、わが國を呼びて、第二の本國といへりしことを記憶す。余輩は、將來に、遠く、君を、海のあなたに慕ひ望むと同時に、君もまた、長く、第二の本國を忘れざることを知る。ほあそなあと君よ、君の第二の本國が、立法上、及び、諸般の事業に於て、いかに、發達するかを見て、幸に、余輩のために、必用なる注意と勸告とを怠ることなかれ。梧陰存稿

學問

堀 秀成

學問は、種種なり。その中に、己が才に應じたるものを撰びて、なすべきなり。人の才たるや、これに應じて、彼に應ぜざること、船は、水に、車は、陸に用ゐざれば、その用をなさざるがごとし。試に思へ、蒸氣機關の便なるも、これを碇に用ゐること難く、碇の、船を止むるに、よろしきも、他の機械に用ゐること難きにあらずや。又思へ、劍の利も、草を刈るには、鎌に及ばず、猿の智も、水に入れば、獺におよばざるにあらずや。されば、學問は、才に應じたるものを撰びて、學ばざれば、いはゆる、勞して功なきものなり。世に、子弟の才を撰ばず、父兄の好むところを、志ひて、學ばしめむとするは、無益のことなり。

天の動物に、その生を與ふるや、鷹には、小鳥を攫まむために、鋭き爪を與へ、鶴、また、鷺には、泥深きところにおり立ちて、食を得むために、長き喙と脛とを與へ、又、水鳥には、水面を泳がむために、脚に水掻を備へ、鼠には、堅きを嚙まむために、齒を利くなし、馬

には、物を積まむために、鞍置をよくす。かくて、人には、良智を興へ、そをはたらかせて、生活をなさしむるなり。この良智をはたらかするには、學問にあらざれば能はざるなり。その學問も、才に應じて撰ばざれば、また、能はざるなり。(説教講録)

田舎人の話

那珂通高

ある田舎人、物買はむとて、東京に来てけるが、歸りて、その郷人にいひけらく、東京は、聞きしにも似ず、もの買ふ事のたよりあしきところなり。紙屋は、南

の町にあれば、筆屋は、西の巷にありなごして、茶、烟草、臘脂、白粉のごときものまでも、一品ごとに、商ふ家のかはりぬるゆゑ、日ごとに、あさりあるきて、からうじて、この物どもは、買ひて來ぬ。ここなる萬屋は、田舎なりとて、侮り居しが、往きて見たまへ、これ等の品品は、さらなり、炭、薪にもあれ、笠、草鞋にもあれ、ひとつ家にて、心のままに買はるを、と、さかしげに言へるもをかし。こは、この萬屋を、ひとつ物もて、なりはひすべくもあらぬ、えせ商人とは、思ひた



らぬゆゑぞかし。されど、物買はむには、さてもありぬべし。身をたてむためにとて、物まなびする人の、ひとつ技に、心留めず、この田舎人に似たるもの多きは、いかにぞや。洋洋社談

勸學

落合直亮

むかしの人の、志をりせし、  
あとをも認めて、わけ行かば、  
ふみのはやしの、そのおくに、  
ほまれの花も、にほふらむ。

いそぎいそぎで、よき枝を、  
はやくも手折れ、いざ子ども、  
おいも忘れて、ちち母は、  
かへりを家に、待つならむ。

塙檢校保己一

栗本鋤雲

塙檢校保己一は、武州兒玉の人なり。群書類從六百卷を刊刻せしなど、和漢古今、瞽盲の第一流に居る人なり。年十四の時、他の瞽者と共に、江戸に來りしが、二人とも、たよるべき所もなく、九段坂の上にて、

さめざめと泣き居たり。時に、内藤安房守、御殿より退出せられしが、この様子を見て、いたくあやしみ、駕籠脇の侍に、いかなる譯なるか、尋ね來よと命ず。侍來て、仔細を問ふに、我我兩人は、兒玉の者にて、遙、江戸に、修業のため出でたるが、本銀町に、かねて知る人ありて、尋ねたるに、その人は、今、行方知れずなりぬ。頼む木蔭に雨漏りて、せむ方なければ、又又、故郷へ戻るべきかと、談合中なりと答ふ。侍は、その由を復命せしに、安房守、それは、いかにも、不便のい

たりなり。ともかくも、屋敷へ伴へとて、連れ歸りて、扶助せられたり。

さて、その一人は、琴を習ひて、終に、世に名人と呼ばるる上手になりしが、檢校は、極めて、不器用にて、遊藝など、さまさま、習はせられたれど、なに一つ覺えず。常に、晝寢のみして、甚だ、怯弱なりしが、ただ、書を好むこと甚しく、ことに、よく、百人一首を諳誦せり。安房守、これを聞きて、さては、彼には、書を聞かせ、歌を詠ますべしとて、師を撰び、教を受けさせしに、果

して、上達せり。廿一二の時には、小著述をなししが、その師、これを閲して、この書、よく出来たり。されど、その許の才にて、かやうなる瑣事をなすは、甚だ、惜しきことなれば、必ず、なすまじ。更に、思を替へ、一層、大志を企つべしといひければ、檢校、大に、その言に感じ、それより、群書類從著述の念を起したりといふ。後に至りて、番町に、和學所を取り建て、かつ、盲人の總録官となれり。この總録官となる人は、必ず、千萬金を蓄へざるものなきに、檢校は、數千金の借財

を殘せり。こは、みな、學校の用と刻書の用とに費ししなりとか。

檢校、極めて、強記にして、一回讀みきかすれば、よく記憶して忘れず。常に、和漢の書に通じたる書生五六人を養ひおき、群書類從の稿本を寫さしめ、傍、奇書珍書を讀ましめ、それを聞くをたのしみとせりといへり。會津の藩士大倉嘉藏といふ人、長く、その家に寓客となりて居たるが、余は、それより聞きしなり。まことに、稀世の人物とやいはむ。龜庵十種

まことの學問

福澤 諭吉

學問とは、ひろき言葉にて、無形の學問もあり、有形の學問もあり。心理學、神學、數學等は、形なき學問なり。天文、地理、物理、化學等は、形ある學問なり。いづれも、皆、智識をひらき、道理をわきまへ、人たるものの職分を知ること、を學ぶなり。

智識を開き、道理をわきまふるためには、或は、人の言を聞き、或は、みづから、工夫をめぐらし、或は、書物をも讀まざるべからず。故に、學問には、文字を知る

こと、必要なれども、世の人の思ふ如く、唯、文字を讀むのみを以て、學問とするは、大なる心得ちがひなり。文字は、學問をするための道具にて、たとへば、家を建つるに、槌、鋸の入用なるが如し。槌、鋸は、普請に缺くべからざる道具なれども、この道具の名を知るのみにて、家を建つることを知らざるものは、これを大工といふべからず。まさしく、この譯にて、文字を讀むことのみを知りて、他を知らざるものは、これを學者といふべからず。所謂、論語よみの論語

知らずとは、即ち、これなり。

わが國の古事記は諳誦すれども、今日の米の相場を知らざるものは、これを世帯の學問にくらき人といふべし。經書、史類の奧義には達すれども、商賣の法を心得て、取引をなすこと能はざるものは、これを帳合の學問につたなき人といふべし。數年の辛苦を嘗め、數年の資金をつひやして、洋學は成業すれども、尙、一個獨立の活計をなし得ざるものは、時勢の學問にうとき人なり。これらの人物は、唯、こ

れ、字を讀むといふにとどまり、その功能は、俗にいふ、飯を喰ふ字引にして、國のためには、寧ろ、無用の長物といふべからむ。さては、世帯も學問なり。帳合も學問なり。時勢を察するも、亦、學問なり。何ぞ必ずしも、和漢洋の書を讀むのみを以て、學問といふ理あらむ。(福澤文集)

二宮尊徳翁の逸話

福住 正 兄

その一

人道は、たとへば、水車の如し。その形、半分は、水流に

順ひ、半分は、水流に逆ひて、輪轉す。全く、水中に沈むれば、廻らずして、流るべく、全く、水を離るれば、めぐることあるべからず。かの佛家にいふところの智識の如く、世をはなれ、欲を捨てたるは、たとへば、水車の、全く、水を離れたるが如し。また、凡俗の、教義も、きかず、義務も知らず、私欲一偏に着するは、水車を、全く、水中に沈めたるが如し。共に、社會の用をなさず。故に、人道は、中庸を貴ぶ。水車の中庸は、よろしきほどに、水中に入りて、半分は、水に順ひ、半分は、流水

を出でて、輪轉滞らざるにあり。人の道も、その如く、天理に順ひて、種を蒔き、天理に逆ひて、草を取り、欲に隨ひて、家業をはげみ、欲を制して、義務を思ふべきなり。

その二

世の人、刃物をとりやりするに、必ず、刃の方をわが方へ向け、柄の方を人の方にして出だすを例とせり。それ、刃の方をわが方にして、先方に向けざるは、萬一、過ある時、わが身には、疵をつくとも、人には、疵

をつけざらむとの意なり。かくの如く、わが身の上をば損ずとも、他の身の上には、損はかけじ、わが名譽は損ずとも、他の名譽には、疵をつけじといふは、これ、やがて、道德の本意なり。これよりさきは、ただ、この心をひろむるにあるのみ。

その三

暴風に倒れし松は、雨露入りて、すでに、倒れむとするところの松なり。大風にやぶれし籬も、杭朽ち、繩くされて、將に、破れむとするところの籬なり。それ、

風は、平等均一に吹くものにして、松を倒さむとして、殊更に、吹くにあらず、籬を破らむとして、わきて、吹くにあらざれば、風なくとも、倒るべきを、たまたま、風を待ちて、倒れもし、破れもしたるなり。天下の事、みな、然り。

その四

家屋のことを、俗に、屋船といふは、おもしろき俗言なり。家をば、實に、船と心得べし。これを船とする時は、主人は、船頭なり。一家のものは、みな、乗合なり。世

の中は、大海なり。されば、この屋船に事あるも、又、世の大海に事あるも、この災は、共に、遁れざるものなれば、船頭は勿論、乗合の人人は、一心協力、この屋船を維持せざるべからず。さて、この屋船を維持するには、楫のとりやうと、船に穴のあかぬやうにするとの二つが、専務なり。この二つに、よく、氣をつくれば、屋船の維持、疑なし。然るに、楫のとりやうにも、心を用ゐず、船に穴あきても、ふさがむともせず、主人は、働かずして、酒を呑み、妻は、遊藝を樂み、悴は、碁、將

碁に耽り、二男は、詩を作り、歌を詠み、安閑として、歲月をおくり、終に、屋船をして、沈没するに至らしむ。嘆息のいたりならずや。

その五

松明つきて、手に、火の近づく時は、速に、捨つべし。火事ありて、危き時は、荷物は捨てて、逃げ出だすべし。船くつがへらむとせば、上荷をはぬべし。甚しき時は、帆柱をも伐るべし。この理を知らざるを至愚といふ。



その六

世上一般、貧富苦樂といひさわけども、世上は、大海の如くなれば、是非なし。ただ、水を泳ぐ術の、上手と下手とのみ。舟を浮べて、用便する水も、舟を覆へされて、溺死する水も、水にかはりはあらず。ただ、時によりて、風に順風あり、逆風あり、海に荒き時あり、穩なる時あるのみ。されば、溺死をまぬがるは、泳の術一つなり。世の海を、穩に渡る術は、勤と儉と讓との三つのみ。

その七

山芋掘は、山芋の蔓を見て、芋のよきとあしきとを知り、鰻釣は、泥土の様子を見て、鰻の居ると居らざるとを知り、良農は、草の色を見て、土の肥えたとと痩せたとを知る、みな、おなじ。こは、所謂、至誠、神の如しといふものにして、永年、刻苦經驗して、發明せるものなり。技藝にこのこと多し。あなごるべからず（三宮尊徳翁夜話）

海泥二鯀の談

榊原芳野

十月、江南、天氣よきに乗じて、一隻の海鰵、濱邊に逍遙し、覺えず、下總の行徳に至りしが、歸るを忘れて、漁父に獲られ、遂に、兩國の中洲に安置せらる。河中の泥鰵、これを吊ふ。海鰵、嘆じて、我と汝と同名なるを以て、辱く吊はる。されど、汝は、卵生にして、淡水に産ずる魚屬、我は、胎生にして、鹹水に育する獸類なるは、近來、人間も、また、知れるところならずや。然るに、汝は、泥字を加へ、我は、海字を加へて、ひとしく、魚類とす。物を辨ぜざるも甚しといふ。泥鰵、笑ひて、請

ふ、かの岸頭の酒店を見よ、招牌上に、くじら汁、どぜう汁と、ならべて兩行に書す。これ、大小の別を知らざるのみならず、汝は、久治良にして、くじらにあらざ、古事記神武の御製、以て徴すべし。我は、土長ツナガにして、どぜうにあらざ、塵添壺囊鈔の語、證するに足れり。已に、彼が如く、その名を誤る。何ぞその實を識るに至らむ。文明の世、猶、文盲の人多し。それ、これを如何せむといふ。海鰵、冷笑して、さては、座頭鯨あるは、わが屬のみにあらざるなりといへり。(洋洋社談)

勤懶二字の説

那珂通高

勤と懶とは、その事相反せり。懶しと思ふ時は、命繫がむ飯すら、ほしからぬ日もあるを、勤むる時は、いかなる難き事にても、苦しと思はざるは、誰も知りたることながら、余は、更に、世の人のために、この二つの文字の體につきて、その義を説き明かさむ。懶の字は、もと、女偏に書きたれども、今は、立心偏なる心の字の傍に、頼むといふ字を添へたるなり。女は、人に身を任するものゆゑ、人を頼み、物を頼む心

切にして、自立すること能はず。懶き者は、これと同じく、今日は、休みたれども、そのかほりに、明日は、よく働かむと、心に頼みて、一日一日と怠るもあり。また、只今こそ、金は持たねど、いつか、儲くる時もあるむと、心に頼みて、一年一年と怠るもあり。これらは、皆、歳月を頼む心より出でたるなり。又、われは、さしたる藝も能もなけれど、何某は、懇意にて、貴き職にのぼり居れば、かならず、いづこにか、肝煎りてくるるならむと、心に頼みて、自ら、勤むることを知らず。

われは、固より、貯とてもあらざれど、誰某は、縁類にて、家富みたれば、まさかの時には、いかでか見捨つべきと、心に頼みて、自ら、勤むることを知らず、これらは、皆、他人を頼む心より出でたるなり。されば、古人も、人によりて、事を成さむことを欲する者は、危しといへり。これ、懶の字の義なり。

勤の字は、その體、董に従ひ、力に従ひ、或は、下に、心の字を添へて、勸とつくれるもあり。董は、原來、毒藥の名なれども、人に従へば、僅の字となりて、物の足ら

ぬをいひ、言に従へば、謹となりて、言すくなに、たしなむをいふ。されば、一日働きくらしても、こればかりにては、わが力の盡しかた、未だ、足らずと、心に勵み、衣食、ほぼ足り、日用缺くることなきも、これのみにては、わが力の盡しかた、未だ、足らずと、心に省み、藝能を磨きては、その力の足らぬことを耻ぢ、衣食を營みては、その力の足らぬことを慮り、歳月を頼み、他人を頼む心なければ、羨むところもなく、又、恨むるところもなし。古人も、民生は勤にあり。勤むれ

ば匱しからずといへり。これ、勤の字の義なり。  
されば、士にして勤むる時は、學問、乏しからず。農に  
して勤むる時は、米錢、乏しからず。工にして勤むる  
時は、器皿、乏しからず。商にして勤むる時は、利益、乏  
しからず。拙き者は、勤によりて、これを補ひ、貧しき  
者は、勤によりて、これを償ひ、足らざるを憂ふる心  
より、足らざる所なきに至るもの、皆、勤の字の功な  
り。余は、少時より、懶をもて性とせしが、今に至りて、  
始めて、これを悔ゆれども、年、既に、老いたるをいか

にかすべき。或人の、わかきとき學ばぬ悔を嚙み去  
むる奥齒なきまで身は老いにけりと、詠める俳諧  
も、今さら、わが身の上と思ひ當りたり。あはれ、世の  
わかき人人、この二つの文字の義を辨へて、老いて  
の後に、悔ゆることなかれ。近體名家文鈔拾遺

新燧社製造場を觀る記 成島 柳北

余のわかき時、爨婢の火を竈に點ずるを觀しに、鐵  
片石塊、錚然相擊ちて、火をいだし、それを硫黃のつき  
たる木片にうつし、以て、薪炭に傳へしのみ、その他

には、火を得べき方法を知らざりしなり。洋船の、わが港埠に来るや、はじめて、擦附木を觀る。余、その妙なるに驚き、かつ、その便なるに服せり。爾來、數十年、こを用ゐて以て、路上に、烟草を喫し、夜間に、燈を點ずるなど、ひとり、竈間、鐵石相撃つ勞に代ふるのみならず、なるなり。然れども、こはみな、海外の製にかかり、未だ、わが國にて、造る能はざること、を嘆ぜり。今を距る四年前、有志者ありて、本所區柳原坊に、その製造をはじめ、その社を新燧社と名づく、と聞き、心

ひそかに、こをよるこべり。近頃、その社長清水誠君を識りしが、本日は、親しく、こを觀るを得たり。余の喜、また、比すべきものなきなり。

それ、擦附木は、些細のものなり。而して、その價も、極めて廉なり。されども、こを造る勞力は、實に、僅少ならず。その木材を、遠く、野州、駿州に取り、なほ、足らずして、こを北海道に搜索し、千里運輸す。こを削るもの、こを擇ぶもの、こを火に乾すもの、これに蠟を塗るもの、これが長短をひとしくするもの、これに藥

を點ずるもの、こを再び温室にて乾すもの、こを束ぬるもの、これが商標を糊するもの、こを十二個に分ちて、紙に包むもの、こを木箱に納れ、以て、他郷及び海外に送るもの、各課をわかち、區を異にす。その製場の廣き、その工人の多き、その課業のはやき、實に、人をして、瞠若たらしむ。その日日に造るところの數を問へば、少なくとも、二十四五萬函に下らずといふ。清水君の、心力を、この業につくすことのおつき、知るべきなり。

仔細に觀閲して、將に去らむとす。清水君、試に、わが教育場をも見よといふ。樓に登れば、これまた、極めて、廣し。數百の工女の幼穉なるもの、日夕、その工を畢ふれば、みな、ここに會し、教師、出でて、これに、算筆を教へ、かたはら、讀書を學ばしむとか。嗚呼、貧人の子女、日に、工錢をかの場に得、又、半文錢を費さずして書を學び、算を習ふを得るなど、その幸福いかにぞや。余、ここに至りて、喜きはまりて、また、いふ能はざるなり。世人、若し、詳に、その實況を認めむと欲せ

ば、試に、往きて、一觀せよ。(萩舎雜錄)

善く働き善く遊ぶべき論

大鳥 圭介

余、英京ろんどんにありて、東京の一友人への書信の中に、かの國の人民の動作を記して、善く働き、善く遊ぶといひしが、今、歸り來て、彼と此とを比較し、更に、その差の甚しきを感じり。

かの國人は、日日、職務に従事するに、豫め、時刻をさだめおき、その時いたれば、場にのぼりて、拮据勉勵

また、餘念なし。かくて、修業の時刻を報ずれば、猶豫することなく、几を蓋ひ、手を洗ひ、家に歸りて、服をぬぎかへ、或は、車を馳せ、馬に乗り、或は、園池に釣を垂れ、河流に扁舟を浮べ、或は、雪を衝き、球を擲ち、或は、花を觀、鳥を聽き、或は、朋友をたづね、親戚をとひ、後、家に歸りて、晚餐を喫するなど、出入動止、時刻のさだめありて、一屈一伸、一弛一張、すべて、そのよろしきに適せり。尤も、出入の時刻、動止の寛嚴は、社會の貴賤と、職業の高卑とによりて、異なれり。かの工



場に出でて、日日、銀錢を得るものは、晴雨寒暑を問はず、修業の時限、九時間乃至十時間にして、通例、朝七時に起きて、五時、又は、六時に止む。その規程のことのへる、その約束の行はるる、實に、讚賞に堪へざるなり。

今、わが國人の、事を執るを見よ。更に、時限の規程を踐むことなく、その勤むべき時に勤めず、いこふべき時に憩はず、その懶惰遲鈍、不規不正なること、朝野都鄙を問はず、士農工商を論せず、大約、一轍なら

む。そのうち、最も甚しきは、職人なり。その工場に臨み、煙草を喫し、火を焚き、幾度となく休憩し、又、その業に就くも、遲鈍にして、戯るるが如く、空談雜話を以て、時を過し、夏日に當りては、悠悠、午睡をなした、だ、空しく、時刻を消し、約にそむきて、耻とせず、かの染職の明後日といふ諺あるも、亦、宜なり。さて又、その休憩の時といへども、勞を慰め、身を養ふことを知らず、或は、飲食を恣にし、或は、睡眠を妄にして、たえて、攝養の法を省みず。かの友會の樂の如きに至

りては、また、問ふべきかぎりにあらざるなり。  
そもそも、個人にありては、出入、度なく、動止、時なきも、小事に似たり。されど、これを一都府、又は、全國にしては、その利害、甚だ、大なり。かの西人が、一國の貧富盛衰を卜するに、民口の多寡を以てするは、これ、民おほければ、業もまた、盛んなるによるなり。さはいへ、人すくなきも、善く働かば、一人にて、三人の業を營み得べく、人おほきも、怠惰ならば、三人を合せて、一人の功におよばざるべし。されば、本邦のごと

きは、いまだ、人煙の稠密を以て、誇るべからざるなり。(近體名家文鈔拾遺)

汽車の旅

佐佐木 高行

八月廿日、午前十一時過ぐる頃、新橋より、汽車に乗りて出發す。折しも、初秋の事をれば、品川、大森の海面、薄霧、たち渡りて、安房、上總の山山も見えず。神奈川、程が谷など、うち過ぎて、はやくも、大船の停車場につきぬ。ここは、横須賀の方へも行くべき追分なれば、上下する人、集散する車、ことに、多かり。

藤澤、國府津の邊を走るに、鎌倉、小田原の往事など思ひいでられて、史乗も、心に浮び、變遷も、目に見ゆる心ちす。足柄、箱根は、海道に名高き峻嶺なれど、今は、居ながら、おりのぼりするなど、開けゆく世の賜にして、越えなやみし古人の紀行も、あらぬ虚言のやうなり。のぼりつめしところは、御殿場の停車場なり。ここに、承久の難に殉せし中納言宗行卿の墳墓ありと聞けど、心に史上をたどりて、車の窓より、空しく、林を眺むるのみ。

沼津、富士川の邊、右に、富士山、高く、懸り、左に、浮島が原、廣く、横れり。松風は、源平對陣の古を語るが如く、水聲は、群鳥驚起の昔を答ふるに似たり。懷舊の情、車輪と共に轉廻して、岩淵、蒲原、由井等の驛路は、いつか走りすぎ、汽車は、倉澤の西、薩陞山の墜道に入る。墜道の暗を出づれば、三保の松原、海原と緑を競ひて、夕波に浮び、伊豆の天城、青雲と高さを比べて、落日に映じ、清見瀉の絶勝は、古今、その奇觀をあらためず。

興津の停車場にて、西よりの汽車を待てる程に、清見寺の鐘響き渡りて、日全く暮れたり。江尻の海岸を行くに、月いづ。漁火は、月に光を奪はれて、遠く、有渡の海に漂ひ、汽船は、沖に烟を残して、近く清水の港に向ふ。清見瀉の廣遠なる景色も、月影と共に、玻璃の小窓に入り來れるこそ、げに、ふたたび逢ひがたき佳霽なれ。昔、この邊の寺僧に、雪舟とて、書を善くするものありけり。渡唐せし時、清江觀月の圖を描出して、かの國人の目をおどろかししが、爾後、か

の國人の、わが國に來遊する者は、かならず、一度、この地に杖をとどめ、自國の瀟湘に比して、愛觀せりとかや。(明治會叢誌)

京都巡覽記

木村 正 辭

八月二十九日、空晴れたり。午前九時頃、平安神宮に參拜す。拜殿の左右に、廊をめぐらし、廊の末に、臺を設けたるさま、宇治の平等院の形に似たり。ここより、南禪寺に行かむとす。粟田口をへて、蹴上に至るに、電氣にて、船を坂の上に引き上げつつあり。諺に、

船頭多ければ、船を山に引き上ぐといふことあるが、今、まのあたり、これを見るなど、移り變り行く世のさまばかり、あやしきものはあらじ。南禪寺は、龜山上皇の離宮を移ししものなれば、その結構、いふばかりなし。佛殿は、いにし年、殿内より火いでて、盡く、焼け失せたりといふ、をしむべきことにこそ。かくて、智恩院の境内をへて、丸山にいたる。靜閑を以て、名高かりしも、今は、家多く立ちならびて、その風景、見るべからず。すこし下れば、八坂神社の後なる

公園に出づ。このころの人のならひにて、種種の若木を、いと並よくうゑわたし、噴水を、いふものを設けたるなど、かへりて、俗びて見ゆ。それより、清水の觀音、高臺寺、三十三間堂、大佛殿を巡覽す。三十三間堂の佛像も、世の中、おしなべて、信仰せしをりは、その數の多きは、やがて、冥福を受くることの多きなりと思ひたらむに、今は、佛像の展覽會ともいふべきさましたり。佛も、いと本意なくおぼし給ふらむ。大佛は、ただ、頭部のみを安置せるも、何とかや奇

怪のおもひあり。すべて、古物を保存すといふにも、  
今すこし、意を用ゐたらましかばとおぼゆ。  
三十日、朝まだきより、雨降りいで、午後にいたり、暴  
風雨となり、夜に入りては、ますます、烈しく、旅店も、  
破壊せられむとせしかば、家の主人、又、男女どもは、  
皆、起き出でて、騒ぎののしるさま、いともものすごし。  
夜中すぎて、漸く、をさまりしが、東京の方は、いかに  
かと思へば、心、なほ、おちゐず。夜のあるを待ちて、  
電信にて問ふに、させる事なしといふ。(中略)

九月一日、晴。九時半ごろより、腕車にて、西山邊を見  
ありく。北野の天満宮にいたれば、一昨夜の風雨に  
て、社前の樹木の倒れたるもの多く、社内は、いたく  
荒れたり。それより、平野の神社、金閣寺、仁和寺、嵯峨  
の釋迦堂等を巡覽す。金閣寺は、定めて、荒れたらむ  
と思ひしに、さはあらで、ただ、庭前の松などの、少し  
く、倒れたるがあるのみ。かくて、嵐山に行かむとて、  
千代の古道を越ゆ。この山道は、開墾して、つくるひ  
たてたれば、いにし年、見し面影とは、いたく、かはれ

り。嵐山は、丹波路よりの水溢れ來りて、大井川に渡せる渡月橋も、なかば落ち、河水は、今に、岸を浸して、漲れり。川邊の割烹店も、水に浸れりとして、下坐敷は、疊をあげたるままにてあり。壁などには、半までも、水のつきたるあと見ゆめり。郭公亭といふ家は、すこし高きところなるによりて、水害をのがれたりとか。川をばえわたらねば、大悲閣には行かず。

三日、空晴れわたれり。清涼殿、紫宸殿等を拜觀す。それより、二條の離宮にいたる。御殿の入口なる四足

御門を拜す。まづ、その精工秀美なるに驚く。こは、豊公の桃山御殿の御門をひきうつしたるものにて、破風、欄間、扉等の彫物は、いづれも、甚五郎の作なりとぞ。それより、内に入るに、御殿の欄間の彫物も、また、悉く、甚五郎の作にして、透明彫なり。表と裏と異なる物を彫りたるに、互に、その形を害せず。その手工の絶妙思ふべし。襖、壁張は、古法眼、永徳等の畫、長押、その他の金物は、いづれも、鍍金、七寶、赤銅等なり。その莊嚴美麗なる、人をして、心神爽快、身の塵世に

あるを忘れしむ。この御殿、外見は、そのみ廣からざるが如きも、内に入れば、おもひの外、廣大にして、間數も、いと多かり。徳川將軍の上洛は、一代一度の定なりしも、多く、代拜にて、自身の上洛は、稀なり。しかるに、その滞在所は、かくの如く、善を盡し、美を盡したるなど、その奢侈、思ひやるべきなり。ここをいでて、桂の御所に至る。御所は、三十日の風雨にて、御殿も、どころどころ破損し、いま、修繕中なり。すべてのさま、いと質素にして、二條の如く、華美ならず、御庭

向井

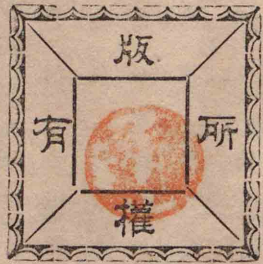
橋本

園は、山のたたずまひ、いと神さび、池の心廣く、ところどころの茶亭は、風流をきはめ、石燈籠、及び、名石、數多あり。樹木は、みな、古木にして、幽深雅致、共に、備れり。大八洲會雜誌

中等國文讀本卷一終



明治三十二年一月廿五日訂正六版印刷  
 明治三十二年一月三十日發行  
 明治三十二年三月九日文部省檢定濟行



著者 東京市本郷區駒込邊嘉町七十八番地  
 落合直文  
 發行者 東京市神田區錦町一丁目十番地  
 三樹一  
 發行者 東京市神田區三河町二丁目十六番地  
 鈴木友三  
 印刷者 東京市京橋區西紺屋町二十六番地  
 玉村秀

定價表	
一、二	各貳拾錢
三、四	各貳拾錢
五、六	各貳拾貳錢
七、八	各貳拾貳錢
九、十	各貳拾貳錢

發行所  
 關西專賣

東京市神田區錦町一丁目  
 大阪市東區備後町四丁目

明治書院  
 吉岡平助



東京市京橋區西紺屋町四式株式會社英舍印行

史記傳  
大傳

明治書院發行圖書要目

山崎庚午太郎編	大崎德太郎編	山崎德太郎編	鳥野幸次編	金關元直撰	金關元直撰	金關元直撰	佐藤英樹校	小島英樹校	村中直義撰	武島羽衣著	武島羽衣著	小中清矩著	落合直文著	鹽井正男著	佐藤英樹著	佐藤英樹著	小中直義著	落合直文著		
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
中日學史要	中日學史要	訂正中日學史要	徒然草讀本	徒然草讀本	神皇正統記讀本	增鏡讀本	大鏡讀本	國歌評釋	新撰歌法	歌舞音樂略史	日本大文典	新古今集詳解	榮華物語詳解	增鏡詳解	大鏡詳解	大鏡詳解	大鏡詳解	大鏡詳解	大鏡詳解	
全三冊	全一冊	全二冊	全一冊	全一冊	全一冊	全二冊	全二冊	全四冊	全一冊	全二冊	全一冊	卷一	卷二	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	
定價金五拾錢	定價金六拾五錢	定價金五拾錢	定價金拾五錢	定價金拾五錢	定價金三拾錢	定價金四拾五錢	定價金六拾錢	定價金九拾錢	定價金四拾錢	定價金七拾錢	定價金壹圓七拾五錢	定價金三拾五錢	定價金四拾錢	定價金四拾錢	定價金四拾錢	定價金四拾錢	定價金四拾錢	定價金四拾錢	定價金四拾錢	定價金四拾錢
郵稅拾錢	郵稅拾錢	郵稅八錢	郵稅四錢	郵稅四錢	郵稅四錢	郵稅拾錢	郵稅拾錢	郵稅六錢	郵稅六錢	郵稅六錢	郵稅四錢	郵稅四錢	郵稅各六錢	郵稅廿四錢	郵稅廿四錢	郵稅廿四錢	郵稅廿四錢	郵稅廿四錢	郵稅廿四錢	郵稅廿四錢

明治書院發行圖書要目

諸大家寄稿	新聲社編	藤井靜子著	興謝野鐵幹著	興謝野鐵幹著	落合直文著	落合直文著	落合直文著	落合直文著	落合直文著	小中村義象撰	今泉定介撰	今泉定介撰	今泉定介撰	今泉定介撰	落合直文著	大久保初雄著
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
國文	若葉集	萩の下の露	天地玄黃	東西南北	高嶺の雪	方丈記讀本	竹取物語讀本	十六夜日記讀本	土佐日記讀本	今昔物語讀本	保元平治解釋	保元平治讀本	保元平治讀本	太平記讀本	新編假名遣	日本中文典
全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全二冊	全二冊
定價一部三錢	定價金拾五錢	定價金貳拾錢	定價金貳拾錢	定價金貳拾錢	定價金貳拾錢	註付定價金拾三錢	註付定價金拾五錢	註付定價金拾三錢	註付定價金拾三錢	定價金廿五錢	定價金拾五錢	定價金拾五錢	定價金拾五錢	定價金三拾錢	定價金六拾錢	定價金六拾錢
郵稅五錢	郵稅四錢	郵稅四錢	郵稅二錢	郵稅二錢	郵稅四錢	郵稅四錢	郵稅四錢	郵稅四錢	郵稅四錢	郵稅四錢	郵稅二錢	郵稅四錢	郵稅四錢	郵稅六錢	郵稅四錢	郵稅四錢

